

1986年ベルリン映画祭国際映画批評家賞 1986年ロッテルダム映画祭最優秀非欧米映画賞 1986年ハワイ映画祭特別賞

侯孝賢監督作品 脚本 朱天文 / 侯孝賢 撮影 李屏賓 音楽 呉楚楚 プロデューサー 徐国良 監修 許新技 エグゼクティブ・プロデューサー 林登飛 製作 中央電影公司 出演 游安順 / 辛樹芬 / 田豊 / 梅芳 / 唐如韞 / 吳素瑩 / 陳淑芳 / 周棟宏

今でも、たびたび思い出す。年老いた祖母の、大陸へ帰る道は、幼いころ、わたしと歩いたあの道なのか。一緒に青サケクロをとった、あの道なのか。

THE TIME TO LIVE AND THE TIME TO DIE

# 童年往事

時の流れ



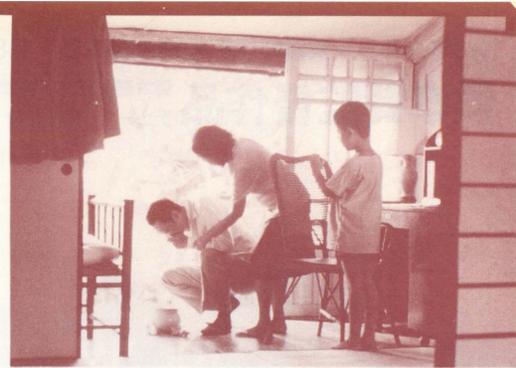
ア.ム

時の流れ

# 童年往事



ここ数年、各国の国際映画祭における中国映画の活躍は目覚ましい。陳凱歌の『黄色い大地』がロカルノで銀賞、新作の『子供たちの王様』もカンヌで高い評価を得、張芸謀の『赤いコーリヤン』はベルリンでグランプリという快挙に輝いている。しかし、今注目すべきもう一つの中



国、台湾に世界で最も優れた映画作家が生まれていることは、わが国ではまだあまり知られていない。'87年のロカルノ映画祭で銀賞を受賞した『恐怖份子』の揚徳昌と共に、世界中の熱い視線を浴びているのが『童年往事』の侯孝賢である。黒澤明の『羅生門』の時のような熱狂と評されたニューヨーク映画祭をはじめ、番外のアンケート投票とはいえ、可能性においてヴェネチア、ジャムッシュに次ぐ作家としてランクされているロカルノ映画祭など、西欧諸国のフィーバーぶりには驚くべきものがある。

「これは子供時代の思い出である」という冒頭のナレーションが端的に語っているように、『童年往事』は、47年に中国に生まれた主人公アハが一家で台湾に移住し、そこでの慎ましかな暮らしぶりを子供のアハの成長に添って描いた映画である。そしてまた、侯孝賢自身の『童年』時代の思い出を下敷きにした自伝的作品

でもある。現在41歳の侯孝賢は、これまでに9本の作品を残す台湾ニューウェイヴの旗手として、この

作品は彼の7作目にあたる代表作である。アハを含め四人の兄弟と姉、父と母、年老いた祖母の八人がアハの家族である。中国の客家族出身の祖母は北京語がわからず、アハと発音すべき「阿孝」を客家語でアハと呼んで可愛がったので、アハが彼のあだ名になった。アハは村のガキ大将的な存在で、のびのび遊ぶ平和な毎日。電線工の肩を売ったり、手作りの独楽で遊ぶ姿は、さながら昔の日本の子供たちの情景だ。しかし、やがて襲う父の死、数年後の母の死が、残された家族に消えない悲しみとして横たわ



る。八十歳に手の届かんとする祖母の望郷の念は強いが、中国との政治情勢は悪化するばかりだ。姉は嫁ぎ、最後に、世話の行き届かない男兄弟ばかりの環境のなかで、祖母が誰にも気づかれずにこの世を去る。

もちろん、この映画は侯孝賢の自伝といえるけれど、個人的な生いたちを伝えるものではない。誰の胸にも響く、子供の心の在り方を、人間を取り巻く苦境を、美しさと哀しみに彩られた人々の心を、生と死を、つまり人生そのものを、ゆったりとした真に映画のな時の流れのなかに映し出そうとする、慎ましくも普遍的な試みなのだ。この映画に對する世界の評価は先にも挙げた通りだが、最後に最も的を得たと思われるロンドンI、C、A、の文章を引用しておこう。

侯孝賢は、たとえば小津安二郎の描くような家族の素朴さで、台湾移住者の家族の細部を、美しい風土のなかに瑞々しく思つかせる。また、時の流れの一枚一枚のスケッチを、ドキュメンタリーと見紛うようなリアリズムのタッチで淡々と積み重ねながらも、彼の素朴な演出は、作品を繊細な織り織り、透明感溢れる叙事詩にまで高めている。二度と帰らない美しい童年、肉親の死や老化

『童年往事』は最も優れた中国映画の一本としてすでに高い評価を得ているが、今後間違いない、子供を描いた映画の古典としてトリュフォー、ヴィゴ、小津の映画と並び称せられるようになるだろう。

THE TIME TO LIVE AND THE TIME TO DIE

## 12月24日土よりお正月ロードショー

特別鑑賞券 1,200円 絶賛発売中 (当日一般 1,500円・学生 1,300円)

都内各プレイガイド、チケット・セゾン、チケットぴあ、セゾン系各劇場他でお求めください。

●12月31日土 6:40の回休映。●正月3ヶ日は休館致します。

日・祝	連日
10:20	1:00 3:50 6:40

●自由席定員制・入替制

# CINE VIVANT

シネ・ヴィヴァン・六本木

地下鉄六本木駅下車1番出口 WAVE地下1階  
お問い合わせ ☎03(403)6061